

令和 4 年 5 月 29 日現在

機関番号：16102

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K21961

研究課題名（和文）四国内の寺院における僧侶間の関係性についての研究

研究課題名（英文）Relationships among Priests in Temples in Shikoku

研究代表者

平川 恵実子（Hirakawa, Emiko）

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・准教授

研究者番号：30881768

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：四国内の仏教寺院で活動していた僧や寺院同士の関係性に注目し、諸寺院の文献目録を参照した。表紙・奥書・識語等に記された僧の名を通覧し、頻度が高い僧を抽出した。その僧が赴き典籍を書写した寺院や、特定の僧が書写した典籍を再び書写した僧、一流伝授の師資関係などを整理し、寺院間や僧侶間の交流の実態を確認した。これらの作業の過程で、徳島県における真言宗寺院の蔵書を調査する必要性が生じたため、他の寺院に影響を与えた瑞龍山無盡蔵院正興寺（徳島県鳴門市）に加え、正興寺と関係の深い東明山大谷院童学寺（徳島県名西郡石井町）の徳島県内の二ヶ寺において蔵書の悉皆調査を行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義

四国内の仏教寺院で活動していた僧や寺院同士の関係性に注目し、諸寺院の文献目録を参照した。表紙や奥書・識語等に記された僧の名を通覧し、頻度が高い僧を抽出する他、寺院間や僧侶間の交流の実態を確認した。また、徳島県の真言宗寺院である瑞龍山無盡蔵院正興寺（鳴門市）と東明山大谷院童学寺（名西郡石井町）の二寺で蔵書調査を行うことにより、新たな資料が確認でき、寺院間や僧侶間の交流がさらに明らかになりつつある。

研究成果の概要（英文）：The relationships between Buddhist priests and temples in Shikoku were studied by referring to the bibliographies of the various temples. The names of the priests written on the front cover, back cover, and scriptures were read through; the priests whose names were written frequently were extracted. We identified the temples to which the priests had gone to copy the texts, those who had copied the texts copied by a particular priest, and the teacher-student relationship in initiation of practical training. In the process of this work, it was necessary to investigate the collection of Shingon temples in Tokushima Prefecture, so we conducted a complete survey of the collection at two temples in Tokushima Prefecture: Shokoji Temple (Naruto, Tokushima), which had influenced other temples, and Dougakuji Temple (Ishii, Myozai-gun, Tokushima), which has a close relationship with Shokoji Temple.

研究分野：日本中世文学

キーワード：古典文学 仏教文学 仏教 聖教 寺院調査

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者はこれまで四国内の寺院を中心とした諸寺院の文献調査に関わってきた。徳島県の願勝寺(徳島県美馬市)や無尽山地蔵寺(板野郡)、香川県の善通寺(善通寺市)や覚城院(香川県三豊市)、京都府の醍醐寺(京都市伏見区)などである。寺院では1点ごとに外題、内題、奥書、識語、書写年、法量などの書誌情報を調査に記入した。そして、調査を持ち帰り、データ入力し、所蔵文献目録として発表することにも継続して行ってきた。

こうした一連の作業の過程において、僧名に着目して来歴を報告したのが、「蔵書から見る覚城院周縁 主要な僧と関連寺院について」(中山一磨監修・編『寺院文献資料学の新展開 第一巻 覚城院資料の調査と研究』臨川書店、2019年、pp.175-206)である。

また、1人の僧に着目して来歴を報告したのが「妙巖房英峯の書写活動について」(中山一磨監修・落合博志編『寺院文献資料学の新展開 第五巻 中四国諸寺院』臨川書店、2020年、pp.175-200)である。妙巖房英峯とは近世末期に宝積寺(愛媛県川之江市)の住職を務めた僧であるが、密教辞典編纂会編『密教大辞典 増訂版』法蔵館、1970年)の「英峯」の項目や、地誌、地方の研究会誌以外には報告がなく、これまでほぼ注目されて来なかった僧である。しかし、英峯の名が記された文献は覚城院の他、香川県では善通寺、本山寺(三豊市)、徳島県では宝壺山願勝寺(徳島県美馬市)、無尽山地蔵寺(板野郡)、国伝山地蔵寺(小松島市)、臨江山地蔵寺(阿南市)に所蔵されている。諸文献の奥書には、各寺院に所属する僧が英峯の書写本を転写したことや、英峯から灌頂を受けたことが記されており、近世期における四国内の僧へ大きな影響を与えたことがわかった。また、善通寺の住職は室町末期に火災で消失した善通寺の聖教を再収集するために、英峯の書写能力を見込んで助力を請い、それに対して英峯は自房の弟子をも伴い他寺の文献書写に協力していたことも明らかになった。

以上のように、寺院の文献を調査しつつ、諸寺院の所蔵文献を閲覧し、その中からキーパーソンを見定め文献を読解することは、既存の研究に繋がると共に、これまで判明していなかった寺院同士の関係性や、寺院の蔵書の蓄積の過程が判明する手応えを得られた。所蔵文献中に名前が頻出するのは、多くの場合、各寺院の歴代住職や、仏教界で著名な人物であることが多いが、それら以外にも英峯のように複数の寺院の所蔵文献に名前を確認できる者もいる。そうした僧達はどのような理由で諸寺院の文献中に名前が頻出するのだろうか」と問いを立てるに至った。

## 2. 研究の目的

四国内の仏教寺院で活動していた僧や寺院同士の関係性を明らかにすることである。既存の寺院調査やそれを基にした研究を踏まえながら、研究代表者がこれまで行ってきた寺院調査及び研究を継続・発展することは、四国内の仏教の広がりや、僧侶間・寺院間の交流を解明するために有益であろうと考えた。

## 3. 研究の方法

(1) 四国内の諸寺院の所蔵文献目録を収集し、表紙・奥書・識語に記された僧の名を整理し、頻度が高い僧を抽出する作業を行う。文献に名前が記される理由としては、文献を書写したり所持したりしたことや、教えを受けたり受けたりしたことなどが上げられるが、なぜその文献を書写あるいは所持していたのか、なぜその教えを授受していたのかといったことなどは、複数の寺院の文献を解析することで判明することがある。

そして、出現頻度が高い僧の内、キーパーソンを見定め、聖教や地誌などを解析することによってその僧の来歴をまとめる。僧の行動範囲によっては近畿地方や中国地方、それ以外の地域の寺院や僧をも調べる。

(2) 調査を継続中の無尽山地蔵寺の他に、新たな寺院の所蔵文献を調査する。これまで研究代表者が関わった寺院文献の傾向の一つとして、新安祥寺流の祖、浄巖の教えを継承した聖教が確認できる。研究代表者が2020年度より勤務する鳴門教育大学が位置する徳島県鳴門市には、新安流の寺院である瑞龍山無尽蔵院正興寺がある。正興寺については吉田寛如編著『正興寺』(正興寺開創二百五十周年記念会、1974年)があるが、本書に掲載された文献を直に見て確認し、より正確な報告を行うと共に、同寺の所蔵文献について悉皆調査し報告する。

## 4. 研究成果

### (1) 文献目録内に高頻度で出現する僧の特定

四国内の仏教寺院で活動していた僧や寺院同士の関係性に注目し、諸寺院の文献目録を参照した。表紙・奥書・識語等に記された僧の名を通覧し、頻度が高い僧を抽出した。各寺院の住職や、特定の僧が書写した典籍を再び書写した僧、一流伝授の師資関係などを整理し、寺院間や僧侶間の交流の実態を確認した。その中でも特に注目したのは、無尽山地蔵寺、願勝寺、覚城院等の諸寺院の文献目録に多数の名前が確認できる智幢という僧である。智幢は1700年半ばから1800年半ばに活躍している。阿波の一字山西福寺に所属し、安流を伝授され、四国内の諸寺院

や高野山で聖教を書写し、後に伝燈大阿闍梨として伝法灌頂を行った人物である。このように、文献の奥書からは、ある程度智幢の行動範囲を確認することができたが、現段階で報告されている文献目録からは詳しい事績を知るには不十分であるため、新たな文献の調査が必要となった。

## (2) 新たな寺院における悉皆調査の開始

2021年6月から瑞龍山無盡蔵院正興寺(徳島県鳴門市)と、正興寺と関係の深い東明山大谷院童学寺(徳島県名西郡石井町)の二ヶ寺において蔵書の悉皆調査を開始した。

正興寺は享保10年(1725)年に、新安流の祖である浄厳(1639-1702)の甥であり高弟でもあった蓮体(1663-1726)の教えを受けた寂如(1665-1741)によって創建された。創建以来、新安流を主としつつ、三宝院流や中院流などの道場として数々の伝法灌頂や一流伝授が行われ、徳島・淡路のほか中国四国の各地から受者が集まる修学・教授活動の一大拠点であった。歴代の住職は、正興寺内で灌頂壇等を開いたほか、各地の寺院からの依頼に応じて出向し、その地で開壇することもあった。また、善通寺(香川県善通寺市)の住職である光国(1736-1809)は寂如に教えを受けており、四国内における新安流の広がりを示している。

童学寺は、飛鳥時代に行基によって創建されたと伝えられる古刹である。天正年間(1573-1592)の戦火によって全山焼失したが、肥後の僧堪靈によって元禄年間(1688-1704)に再建された。正興寺を開創した寂如は、正興寺創建以前には童学寺を住持しており、正興寺に移るに当たって、童学寺を弟子の印光に譲っている。また、正興寺九世の黙雅は、童学寺住職から正興寺に転住している。このように童学寺は正興寺と密接な関係を保ちながら、寺内で度々伝法灌頂や一流伝授を開く道場であったことが知られている。

正興寺では、6月25日、7月2・9・16日、9月3・10・17・24日、10月1・8・15・22・29日、11月5・19・26日、12月3・10・24日、1月7・14・28日、2月4・14・18日、3月14・28日に所蔵文献の悉皆調査を行った。童学寺では、6月26日、7月10日、9月4・11・18日、10月16・23・30日、11月20日、12月4・11・18日、1月8・22・29日、2月7・21日、3月7・26日に所蔵文献の悉皆調査を行った。現地では資料ごとに所蔵番号をつけ、所定の調査用紙に外題・内題・法量・書写年・奥書などの書誌事項を記し、写真撮影を行った。そして後日、その画像を文献番号順に整理した。寺院調査に必要なデジタルカメラやノートパソコン、その他記録媒体等は「研究活動スタート支援」の基金によって購入したものであるため、謝意を表したい。

上記の調査によって、二ヶ寺の蔵書の有様が確認でき、寺院間や僧侶間の交流が徐々に明らかになりつつある。

## (3) 今後の展望

本研究では、本来は四国内や関西地方の寺院でも蔵書調査を行うことを予定していた。しかし、本研究1年目から新型コロナウイルスの流行の影響により、県外への行き来がままならない状況になったため、他県での調査を断念せざるを得なかった。今後は新型コロナの感染状況を窺いながら、可能ならば他県の寺院でも蔵書調査を行い、新たな資料の確認作業をしつつ、僧侶の行動履歴を探り、寺院や僧同士の交流の実態を明らかにし、論文にまとめたい。

新たに調査を開始した徳島県内の二ヶ寺においても、研究代表者のような外部の者が訪問することは感染防止のために憚られる時期もあったため、無事調査を開始でき、継続できていることについては、寺院の方々に感謝したい。今後も調査を続行し、ある程度進んだ時点で、両寺の所蔵文献目録を冊子体で刊行すると共に、鳴門教育大学機関リポジトリで公開することを予定している。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 原卓志、梶井一暁、町田哲、平川恵実子、刀田絵美子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 なし	5. 総ページ数 499
3. 書名 無盡山莊嚴院地藏寺所蔵文獻目録[第7冊]	

1. 著者名 原卓志、梶井一暁、町田哲、平川恵実子、刀田絵美子	4. 発行年 2020年
2. 出版社 なし	5. 総ページ数 399
3. 書名 無盡山莊嚴院地藏寺所蔵文獻目録[第8冊]	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------